

『教育フロンティア』一九六四年七月（全国プログラム学習研究連盟編／教育出版）

《プログラム学習の原理研究 4》

道徳的態度の訓練について

矢口 新



前号では科学的態度ということを中心として考えてみた。態度と
いう言葉を使うと、思考とはちがったものであるかの如くに考えが
ちだが、それもやはり、脳の思考行動である。その思考の仕方が
習慣となっているとき、態度というのである。態度ということと言
い出したついでに、道徳的態度ということを中心に考えてみよう。こ
れも大脳の行動であることにまちがいはない。

■ 道徳は行為の問題である

わが国では、道徳教育の問題が結局は、読み物を読ませるとい
うな形におちついてしまう傾向が強い。道徳教育がいつもそういう
ころに落ちつくことに對して不満をもつ人も多いが、といってそれ
上によい知恵も出ないままに過ぎて行く。その辺の問題を考えてみ
よう。

道徳が身につけているということとは、ある具体的な行為が道徳に
なっているということである。行為ができなければなんにもならない。

その意味では、ただ単に考え方の問題ではない。考え方が意志を決
定して、行為となつてあらわれることが大切なのである。このこと
を従来の考え方にしたがって言えば、道徳的な判断ばかりでなく、道
徳的心情を養つておかねばならないということになる。

しかし、判断と心情ばかりでなく、具体的に行動をとるわけ
であるから、具体的な行為の仕方も心得ていなくてはならない。これ
は、大体三つの側面があつて、これが三位一体となつていなくては
ならぬ。教育もまたその点から考えられなければならないというよう
に言われている。

この三つの側面に対して、教育はどのように行なわれているであ
るか。今の道徳教育は、残念ながら教育の名に値しないようなこと
をやっているのではないだろうか。

次にそれらの点を考えてみよう

■ 道徳的判断とは

道徳的判断というのも、単純なものあれば複雑なものもある。例
えば道を歩いていて向うから先生が来た。側へ行つておじぎをするか、

逃げてしまいか、とっさの間に判断して行動する。これもやはり判断が先行するのである。挨拶などということは、ある場合には判断を要しないほど反射的な行動である場合が多いが、しかしそれは瞬間的に行なわれるということ、そこに判断がないわけではない。掛け算の九々のように反射的に出て来るという意味では、訓練の結果成立するものである。大脳の行動としてみれば、対象を認めて、それにふさわしい行動をするように身体各部に大脳から指示が発せられる。それが一瞬の間に行なわれるのである。

このような大脳の働きを訓練することが教育であろう。それをもし、先生を見たら挨拶をしましよというようなことを一度や二度言うだけで、そのような行動を成立させ定着させよとしたら到底できないであろう。やはり、具体的場に当面して、その場で挨拶することを実行し、それをくりかえして行くうちに、やがてスムーズにできるようになるであろう。

知っている人を見たら挨拶するなどということは、常識になっているから、家庭の親も兄弟も知っている。それらの人が子供に強要して実行させるから、学校でとくにやかましく言わなくとも、訓練がたえずなされているということになる。それが、こういう行動が身につく理由である。だから、ある意味からすれば、これらの行動の定着は学校の教育のたまものより、長い時間をかけた家庭の教育のたまものだけといってよい。

しつけは家庭のやることだということ、言われるのは、この意味では正しいのである。このようにして定着してゆく行為というのは多いのである。しかし日本ではその点の自覚が乏しいから、日本人のしつけは欧米の人々にくらべて見劣りがするのである。

例えば、道路上での行動の仕方、バスや電車に乗る時の行動の仕方、

公立の施設を使う時の態度など、殆んど出来ていないのである。道路をよごすこと、歩きながら紙くずを捨てる、煙草の吸いがらを捨てる、電車やバスに乗る時に平気で列に割りこむ、中には列をつくっていることに全然気がつかない人種がいる、電車に乗って自席の両わきを半人分位ずつあけて席をとる、列車に乗って洗面所をよごすことは平気である、といったことを数えあげたらきりが無い。

■ 判断と行為

こういった種類の行動は、どちらかと言えば反射的に行動できるように訓練しなくてはならない。やはりくりかえしによって定着させるべきことである。しかしそのくりかえしの訓練が行なわれないのである。第一にまず、おとなにそれと反対の行動をする人が多い。むしろくりかえすのはその悪い方である。大人が、悪い模範を終始見せているし、子供もそれを見ながらいる。

しかし、たまたまそういう悪い習慣を改めてよいしつけをしなくてはならぬと思う人がいても、それを日本人のくせで、口で教えることのできると考える。学校で先生によく言い聞かせてもらえばそうなると思う。何かというと学校で教えるというのは日本人のくせである。この教えるというのは結局、言い聞かせることである。言い聞かせればそうなるという迷信は日本人にはとても強い。毎日具体的場面で言い聞かせでもすれば効果があるのだが、日本の学校は一度言い聞かせたら同じことは二度やらない主義である。重複だと考える。そういう考え方では、行為は定着しないのである。

道を歩きながらつばを吐く日本人は多い。しかし誰もたたみの上につばを吐くものはいない。だからつまり道を見ることが、畳の如くなればよいのである。これは大脳の習慣なのである。それはくりかえしの

行動による以外ないわけである。道を歩くとき畳の上を歩く如くするようにさせるわけである。そういうことをさせる力が社会になれば、その社会の中で育つ人間はそういう行動をとるようにはならない。

一人の子供を考えれば、それをとりまく親や兄弟や、さらに友人や学校の教師や、さらに社会の多くの大人どもが、その一人に要求すれば、その一人の子供はすぐにもなるといってよい。所が事実はその反対であって、家庭の親や兄弟も、その他の子供をとりまく社会も、道はつばをはいたり、ごみをすててもよい場所だと思っており、そういうことを毎日して生活している。今の大人が子供の時もそうであり、その大人がまた子供にそれを教えているのである。

■ 態度ということ

態度というのはやはり脳の思考行動である。ただ、非常なスピードでその思考が行なわれているから、思考が行なわれないように見えるだけである。

本人はなにげなしに道にごみをすてたり、つばをはいたりするが、それは、道に対する脳の反応の仕方をあらわしているわけである。そういうものが積みあがって、一人の人間の社会に対する反応の仕方もでき上っているのである。

列車に乗って洗面所をよごして立ち去るのは、人々の使う公共物に対するその人の大脳反応の仕方をあらわしている。その同じ人が電車に乗って、キョロキョロと自分のお尻をもって行き場所ばかりをさがし、一たん腰をおろしたら、傍若無人に二人分の席をとっているということだったら、その人は、社会全体に対しての反応の仕方が極めて低級だといわなくてはなるまい。その人は社会の中に生きているセンスがない人だといってよい。

いな、本当はそういう言い方は飛躍している。低級な社会の中に生きて行くセンスの持主だといった方がよい。社会の人々がみんなそうで、そうした方がとくだという考え方もある。いな、とくとかそんなと考える以前である。道がよごれても、気にならない人もいる。自分もよごすけれども、人がよごしても気にならない。電車の中の席の取りっこをスポーツのように思う社会なら、それでよい。人のそういう行動も気にならないし、自分もえげつないことを平気でする。

今の日本の社会は大体そういうレベルだから、えげつない人間の方がより社会的といえるかも知れない。いな、えげつない社会の中での行動のくりかえしが、えげつない人間をつくっているのである。

これに対して、現代の学校がせいぜい一年に一度ぐらい公衆道徳ということの授業を展開したとしても、何程のことがあるうか。公けのものを大切にするとしようという抽象的な話では、物になるまい。

■ 意識を育てるということ

道徳的教育では意識を育てようとする。意識を育てようとする、道徳時間の授業ということになる。例えば、公けのものを大切にすること、話を話して聞かせたり、誰かの例話をはなしたり、本を読んだり、またそれを皆で考えたりすることで、意識をつくると、それが行動にあらわれると考えているのである。

この考え方には思いがいがあるのではないか。もちろんそういう意識のつくり方がないということではないが、意識は逆に行動を通してつくられるという大切なことが忘れられていないか。

公衆のものを大切にすること、一般的な概念ではあるが、具体的にそういう行動はあり得ない。具体的には道を歩く時どうするとか、列車の洗面所でどうするとかいうことであって、大脳の行

動はそこで、具体的に思考としてあらわれるのである。一般的な概念はその具体的なものの共通的な表現であるにすぎない。

現実の脳の行動はその具体的なものにおいてあらわれる。脳の反応の仕方は、具体の場で行動をくりかえすように作られる。その自覚が意識というものである。意識というのは脳の行動のあり方を自覚という位相でとらえたものである。自覚的な行動はくりかえすうちに、無意識な行動にもなってしまう。そういう行動にささえられて自覚的な行動も存在しているのである。

一般的な概念もそれとの関連において具体的な意味をもって来るのである。このように考えると、意識を育てるという従来のやり方は、それだけでは実は無意味であるといってもよい。それが意味をもつのは、それに伴って、具体的な行動の場でのくりかえしが行なわれるからである。例えば、社会を愛するというようなことをいくら口で言い聞かせても、何の意味もあるまい。具体的な行動において、こういうことが社会を愛するということだといえ、社会を愛するという概念が内容をもつことになる。内容のない、つまり空虚な概念は道徳とは本来関係のないことである。道徳とは社会という具体の場での行動のあり方なのであるから。

そうなると、意識をつくるということは、具体的な行動に積みあげることであって、現在の学校の教育のように、それと別個に考えられていたのでは無意味だということになる。いわばスモール・ステップで、行動を積みあげて来て、その自覚ということにならなければならない。そういうものの上に一般的な概念としての社会を愛するという意識も、はじめて存在の意識をもつことになるのである。

かくして道徳教育もまたプログラム化されねばならない。現在の教育が意識を重視してもつぱら概念的な教育を行なっているのは、地盤

のない所に家を建てようとしているようなものである。あるいは数学で、たし算、ひき算のできないものに、割り算、掛け算を教えようとしているようなものである。

結論だけを注入しようとして、プロセスを忘れようとしているという現代教育の欠陥はここにも明らかに見られるといわなくてはならない。道徳的な人間をつくらうとすれば、そこにもやはりスモール・ステップで道徳的行動の仕方をつみあげて行くプログラムがなくてはならないのである。このプログラムは紙の上のプログラムではないから、なかなかむずかしいが、しかし、そういうプログラムを社会がもっていないければ、人間は道徳的人間とはならないことだけは確かである。

■ 心情について

心情というようなことが言われるが、心情とは何であろうか。これについても現代は意識についてそうであるように、具体的な行動から遊離して抽象化して考えている。そしてその教育は宙に浮いたものとなっている。心情を養うといって、何か感情に訴えることを考えればよいというような考え方しかしていない。そうなると物語を聞かせたり、あるいは映画や幻灯を見せることだ位にしか考えられて行かないのである。

心情というものも、結局は脳の行動の仕方である。それは具体的な行動とともに存在するものであって、物の体にもなう影の如きものである。例えば、前に述べた道を歩くときの正しい行動の仕方、電車にのるときの正しい行動の仕方、そういったものを行ないつづけている人間は、そこに安定したものをもち、自信をもって行動する。反対にそうしないと不安定になる。また、他人がその行動を妨害すると

これに対して反発を感じ、憤りを感じる。人も自分と同じように行動すれば、そこに喜びを感じる。これらを心情というのである。だから心情を育てるといふのは、行動を定着させることだと言いかえてもよいわけである。正しい行動が定着すれば、必ず正しい心情がつきまわっているということである。行動を問題にしないで、心情を養うなどということとは、ナンセンスのたぐいであろう。

よい映画をみせて感激するということも、それは見る者に行動のうらづけがあり、見る者が自分の行動と心情をそこに移入しているから感激するので、その意味では感情の自己生産をしているにすぎない。そういう地盤をもたない人にとっては教育的意義をもたないといふべきであろう。だからそういう映画が意義を発揮したとすれば、やはり地盤があつたからで、むしろ前提があるのである。それはスモール・ステップによつて養われたものといつてよい。

■ 価値観の衝突ということ

道徳的意識を調べるのに価値の衝突の場をとつて調べるといふようなことが行なわれているが、こういう場合にも大切なことは、それがどれだけ具体の行動の場の問題となつているかということである。具体の行動の場でそういう心情が動くことはある。右か左かということである。それは単に意識だけの問題、抽象的な概念の問題ではない。全人間的な行動の裏付けをもつた場面における価値の衝突の問題である。そういう所で、それまでに育てられたものが大きく動くのである。全体が構造づけられるのである。それは単に観念の遊戯ではない。ゲームではない。まさに全身全霊を動かしたたかひの場である。そういう場の教育といふのは、師と弟子との同行といふようなことによつてのみ成立つといつてもよい。もつとも人間的なものである。親と

子の同行によつてその場をのり切ることによつて教育が成立するといふような場である。ちょうど水泳のようにそこを乗り切らなければならぬのである。ただ頭で考えるといふようなことではない。

現代の教育ではそれが欠けているのである。道徳的教育が概念的遊戯におちているといわれる所以である。

■ 道徳教育のプログラム

以上、考えて来ると、道徳的教育というものも、態度といい、心情といい、意識というものも、結局は大脳の反応行動をつくりあげ、その習慣をつくりあげることである。それらは、できることをつみあげてスモール・ステップによつて次第に高いものができるようにして行くべきものである。

前にのべたと同じように、ある結論的な知識を注入することによつてできるのではない。一つ一つ大脳が正しく行動できるように積みあげて行くべきものである。それが行なわれる場合は、社会という人間関係のいる場である。その行動をコントロールすることができなければ教育は成立しないのである。

そのコントロールは、教室の中で言い聞かせるなどということのみではない。実際の場でのコントロールでなければならぬ。そういう制御をするものは親であり、社会の人である。さらに仲間同志である。そういう制御の体制をつくる以外に、人間が人間となる道はないのである。人間が人間となるのは、人間の社会の中においてである。

そのような考え方が教師の中に確立すれば、そうして教師以外の人々がまだそういう自覚がないならば、教師が中心となつて、社会のコントロール体制をつくりあげる努力をしなければならぬのではないか。こうして、教師のつくる道徳教育のプログラムは、家庭の生活

の中の行動のあり方、親が子を導くときの行動のあり方、社会のさまざまな場における行動のあり方というようなものになって来るのである。またそのプログラムを実施する人々をつくることになる。これは一種の運動ともいえるべきものであろう。

しかしそういうものがなくては道徳的人間をつくることはできないのである。

これは教師の行なうべきことでないというならば、あるいは現代の学校の教師の任務からは確かに外れているかも知れない。それを認めるなら、現代の社会には道徳教育をする人間はいないということになる。それが現代の欠陥であるということになるのである。ただ欠陥ですむならばよいかも知れないが、それが現代社会を破壊し、われわれの存在を危くするものであるならば、考えなければならぬことになる。座して社会の破滅を待つわけには行くまい。

現代の社会が、そういう破壊と混乱の方向へ動いていることは、誰にも認められている。そうしてそれが道徳教育の声を高くする人々を多くして来ていることも確かである。それがしかし、誤った道徳教育観によって、ただ観念の遊戯に終わって、実際に道徳的行動を育てないならば、人間は観念と行動との分裂を来し、口でもっともなことを言い、行動でそれと裏腹のことをするようになるであろう。現代人の欠陥はまさにその点にあるといつてよい。

それを救う道徳教育のプログラムは、やはり教育者によって立てられなければならない。それは一言にして、道徳的行動をスマール・ステップで積みあげるプログラムである。

(国立教育研究所 第一研究部第二研究室長)